

日本におけるモノづくりの原点



～零戦からMRJへ～



提供:三菱重工業(株)・三菱航空機(株)

特集

「風立ちぬ」、「永遠の0」など、昨年から今年にかけて、零戦が物語の大切な役割を担う映画が上映され、話題となっています。

太平洋戦争において日本の主力戦闘機であった零戦は開発当時、世界一の性能をもつ航空機でした。

そのモノづくりの精神は、私たちが心待ちにしている、MRJ(三菱リージョナルジェット)へと受け継がれています。

今月号では、今年度の航空文化フェスタのテーマと、零戦についてご紹介します。

●零戦から受け継がれたDNA

零戦(セロ戦)の正式名称は、零式艦上戦闘機です。

太平洋戦争が始まった昭和十六年に、正式に日本軍に採用され、現在の三菱重工業(株)の大江工場(名古屋港区)を中心に、約一万機が生産されました。

軽くて速く、運動性能も高く、一度に飛べる距離も長いことから、戦争の初期には無敵といわれ、アメリカ軍から恐れられていたそうです。

設計したのは「風立ちぬ」のモデルとなった堀越二郎です。彼はその後、日本初の国産旅客機、YS-11の設計にも関わりました。

●豊山町にも零戦があります

三菱重工業(株)名古屋航空宇宙システム製作所小牧南工場史料室には、零戦の復元機が展示されています。

太平洋戦争中の昭和十九年に三菱重工業大江工場で生産されたもので、戦後、ミクロネシア連邦ヤップ島で発見・回



零戦の復元機の勇姿

収された残骸を基に作られた機体です。

史料室には堀越二郎の直筆の手紙や、零戦の図面や取扱説明書、設計チームの集合写真なども展示されていて、零戦にこめられた人々の情熱を今でも感じる事ができます。

そのほかにも、航空機の開発に関わる貴重な史料が数多く公開されていて、全国から飛行機ファンや研究者が訪れています。

史料室は一般の方も見学することができます。ただし、毎週木曜日のみで、事前に予約が必要です。

なお、次ページでお知らせする今年度の航空文化フェスタ当日は、特別に予約なしでも入室することができます。



貴重な史料が展示されています

▼史料室に関する問合せ 三菱重工業(株)名古屋航空宇宙システム製作所史料室 ☎28・1112

●零戦からMRJへ

最新の航空機の製作現場というと、クリーンルームの中でロボットがネジを締めていると想像されるかもしれませんが、

しかし、実際の現場では、私たちが日常生活で使っているドライバーや金づちなどとほとんど変わらないような道具も使って、ひとつひとつ、作業員の方が精魂をこめて、部品を組み上げているのです。

その様子は、まさに、「モノづくり」です。今年の航空文化フェスタでは、まさに現在、最終組立に入っているMRJの生産に携わっている専門家から、わが国が誇る航空機生産技術と、その歴史について、わかりやすくお話をいただきます。